

(三) 兩國政府ハ相互ニ通商關係ヲ資産凍結前ノ狀態ニ復歸スルコト、合衆國政府ハ所要ノ石油ノ對日供給ヲ約スルコト

(四) 合衆國政府ハ日支兩國ノ和平ニ關スル努力ニ支障ヲ與フルカ如キ行動ニ出テサルコト

(五) 帝國政府ハ日支間和平成立スルカ又ハ太平洋地域ニ於ケル公正ナル平和確立スル上ハ現ニ佛領印度支那ニ派遣セラレ居ル日本軍隊ヲ撤退スヘク又本了解成立セハ現ニ南部佛領印度支那ニ駐屯中ノ日本軍ハ之ヲ北部佛領印度支那ニ移駐スルノ用意アルコト

等ヲ内容トスル新提案ヲ提示シ同時ニ支那問題ニ付テハ合衆國大統領カ曩ニ言明シタル通、日支間和平ノ紹介者ト爲ルニ異議ナキモ日支直接交渉開始ノ上ハ合衆國ニ於テ日支和平ヲ妨碍セサル旨ヲ約センコトヲ求メタルカ、合衆國政府ハ右新提案ヲ受諾スルヲ得スト爲セルノミナラス援行動ヲ繼續スル意思ヲ表明シ次テ更ニ前記ノ言明ニ拘ラス大統領ノ所謂日支間和平ノ紹介ヲ行フノ時機猶熟セストテ之ヲ撤回シ遂ニ十一月二十六日ニ至リ偏ニ合衆國政府カ從來固執セル原則ヲ強要スルノ態度ヲ以テ帝國政府ノ主張ヲ無視セル提案ヲ爲スニ至リタルカ、右ハ帝國政府ノ最モ遺憾トスル所ナリ。

四、抑々本件交渉開始以來帝國政府ハ終始専ラ公正且謙抑ナル態度ヲ以テ銳意妥結ニ努メ屢々難キヲ忍ヒテ能フ限リノ讓歩ヲ敢テシタルカ、交渉上重要タリシ支那問題ニ關シテモ協調的態度ヲ示シ合衆國政府ノ提唱セル國際通商上ノ無差別待遇原則遵守ニ付テハ本原則ノ世界各國ニ行ハレンコトヲ希望シ且其ノ實現ニ順應シテ之ヲ支那ヲモ含ム太平洋地域ニ適用スル様努力スヘキ旨ヲ表明シ尙支那ニ於ケル第三國ノ公正ナル經濟活動ハ何等之ヲ排除スルモノニアラサルコトヲモ闡明セルカ更ニ佛領印度支那ヨリノ撤兵ニ付テモ情勢緩和ニ資スルカ爲前述ノ如ク南部佛領印度支那ヨリノ即時撤兵ヲ進ンテ提議スル等極力妥協ノ精神ヲ發揮セルハ合衆國政府ノ夙ニ諒解スル所ナリト信ス

然ルニ合衆國政府ハ常ニ理論ニ拘泥シ現實ヲ無視シ其ノ抱懷スル非實際的の原則ヲ固執シテ何等讓歩セス徒ラニ交渉ヲ遷延セシメタルハ帝國政府ノ諒解ニ苦シム所ナルカ特ニ左記諸點ニ付テハ合衆國政府ノ注意ヲ喚起セザルヲ得ス

(一) 合衆國政府ハ世界平和ノ爲ナリト稱シテ自己ニ好都合ナル諸原則ヲ主張シ之カ採擇ヲ帝國政府ニ迫レル處世界ノ平和ハ現實ニ立脚シ且相手方ノ立場ニ理解ヲ持シ相互ニ受諾シ得ヘキ方途ヲ發見スルコトニ依リテノミ具現シ得ルモノニシテ現實ヲ無視シ一國ノ獨善的主張ヲ相手國ニ強要スルカ如キ態度ハ交渉ノ成立ヲ促進スル所以ノモノニアラス。

今般合衆國政府カ日米協定ノ基礎トシテ提議セル諸原則ニ付テハ、右ノ中ニハ帝國政府トシテ趣旨ニ於テ賛同ニ吝ナラサルモノアルモ合衆國政府カ直ニ之カ採擇ヲ要望スルハ世界ノ現状ニ鑑ミ架空ノ理念ニ驅ラルルモノト云フノ外ナシ。

尙日、米、英、支、蘇、蘭、泰七國間ノ多邊的不可侵條約ヲ締結スル案ノ如キモ徒ニ集團の平和機構ノ舊構想ヲ追フノ結果、東亞ノ實情ト遊離セルモノト云フノ外ナシ。

(二) 合衆國政府今次ノ提案中ニ「兩國政府カ第三國ト締結シ居ル如何ナル協定モ本取極ノ根本目的タル太平洋全域ノ平和確保ニ矛盾スルカ如ク解釋セラレサルコトニ付合意ス」トアルハ合衆國カ歐洲戰爭參入ノ場合ニ於ケル帝國ノ三國條約上ノ義務履行ヲ牽制セントスル意圖ヲ以テ提案セルモノト認メラルルヲ以テ右ハ帝國政府ノ受諾シ得サル所ナリ。

由來合衆國政府ハ其ノ自己ノ主張ト理念トニ眩惑セラレ自ラ戰爭擴大ヲ企圖シツツアリト謂ハサルヲ得ス。合衆國政府ハ一方太平洋地域ノ安定ヲ策シ自國ノ背後ヲ安固ト爲シツツ他方英帝國ヲ援ケ歐洲新秩序建設ニ邁進スル獨伊兩國ニ對シ自衛權ノ名ノ下ニ進ンテ攻撃ヲ加ヘントスルモノナルカ、右ハ太平洋地域ニ平和的手段ニ依リ安定ノ基礎ヲ築カントスル幾多ノ原則的主張ト全然矛盾背馳スルモノナリ。

(三) 合衆國政府ハ其ノ固持スル主張ニ加テ武力ニ依ル國際關係處理ヲ排撃シツツ一方英帝國等ト共ニ經濟力ニ依ル壓迫ヲ加ヘツツアル處、斯ル壓迫ハ場合ニヨリテハ武力壓迫以上ノ非人道的行爲ニシテ國際關係處理ノ手段トシテ排撃セラルヘキモノナリ。

(四) 合衆國政府ノ意圖ハ英帝國其ノ他ノ諸國ヲ誘引シ支那其ノ他東亞ノ諸地域ニ對シ其ノ從來保持セル支配的地位ヲ維持強化セントスルモノト見ルノ外ナキ處東亞諸國カ過去百有餘年ニ亘リ英米ノ帝國主義的搾取政策ノ下ニ現状維持ヲ強ヒラレ兩國繁榮ノ犠牲タルヲ甘ンセサルヲ得サリシ歴史的事實ニ鑑ミ右ハ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメントスル帝國ノ根本國策ト全然背馳スルモノニシテ帝國政府ノ斷シテ容認スル能ハサル所ナリ。

合衆國政府今次提案中佛領印度支那ニ關スル規定ハ正ニ右態度ノ適例ト稱スヘク佛領印度支那ニ關シ佛國ヲ除キ日、米、英、蘭、支、泰六國間ニ同地域ノ領土主權ノ尊重並ニ貿易及通商ノ均等待遇ヲ約束セントスルハ同地域ヲ六國政府ノ共同保障ノ下ニ立タシメントスルモノニシテ佛國ノ立場ヲ全然無視セル點ハ暫ク措クモ東亞ノ事態ヲ紛糾ニ導キタル最大原因ノ一タル九國條約類似ノ體制ヲ新ニ佛領印度支那ニ擴張セントスルモノト觀ルヘキモノニシテ帝國政府トシテ容認シ得サル所ナリ。

(五) 合衆國政府カ支那問題ニ關シ帝國ニ要望セル所ハ或ハ全面撤兵ノ要求ト云ヒ或ハ通商無差別原則ノ無條件適用ト云ヒ何レモ支那ノ現實ヲ無視シ東亞ノ安定勢力タル帝國ノ地位ヲ覆滅セントスルモノナル處、合衆國政府カ今次提案ニ於テ重慶政權ヲ除ク如何ナル政權ヲモ軍事的政治的且經濟的ニ支持セサルコトヲ要求シ南京政府ヲ否認シ去ラントスル態度ニ出テタルハ交渉ノ基礎ヲ根柢ヨリ覆スモノト云フヘク、右ハ前記援蔣行爲停止ノ拒否ト共ニ合衆國政府カ日支間ニ平常狀態ノ復歸及東亞平和ノ回復ヲ阻害スルノ意思アルコトヲ實證スルモノナリ。

五、要之今次合衆國政府ノ提案中ニハ通商條約締結、資産凍結令ノ相互解除、圓弗爲替安定等ノ通商問題乃至支那ニ於ケル治外法權撤廢等本質的ニ不可ナラサル條項ナキニアラサルモ他方四年有餘ニ亘ル支那事變ノ犠牲ヲ無視シ帝國ノ生存ヲ脅威シ權威ヲ冒瀆スルモノアリ、從テ全體的ニ觀テ帝國政府トシテハ交渉ノ基礎トシテ到底之ヲ受諾スルヲ受諾スルヲ得サルヲ遺憾トス。

六、尙帝國政府ハ交渉ノ急速成立ヲ希望スル見地ヨリ日米交渉妥結ノ際ハ英帝國其ノ他ノ關係國トノ間ニモ同時調印方ヲ提議シ合衆國政府モ大體之ニ同意ヲ表示セル次第ナル處、合衆國政府ハ英、濠、蘭、重慶等ト屢々協議セル結果特ニ支那問題ニ關シテハ重慶側ノ意見ニ迎合シ前記諸提案ヲ爲セルモノト認メラレ、右諸國ハ何レモ合衆國ト同シク帝國ノ立場ヲ無視セントスルモノト斷セサルヲ得ス

七、惟フニ合衆國政府ノ意圖ハ英帝國其ノ他ト苟合策動シテ東亞ニ於ケル帝國ノ新秩序建設ニ依ル平和確立ノ努力ヲ妨碍セントスルノミナラス日支兩國ヲ相鬭ハシメ以テ英米ノ利益ヲ擁護セントスルモノナルコトノ今次交渉ヲ通シ明瞭ト爲リタル所ナリ。斯クテ日米國交ヲ調整シ合衆國政府ト相携ヘテ太平洋ノ平和ヲ維持確立セントスル帝國ノ希望ハ遂ニ失ハレタリ。

仍テ帝國政府ハ茲ニ合衆國政府ノ態度ニ鑑ミ今後交渉ヲ繼續スルモ妥結ニ達スルヲ得スト認ムルノ外ナキ旨ヲ合衆國政府ニ通告スルヲ遺憾トスルモノナリ。

1941年12月8日

<https://worldjpn.net/documents/texts/docs/19411208.O1J.html>

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相鬩クラ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 * 注 * 御璽

昭和十六年十二月八日

內閣總理大臣兼內務大臣陸軍大臣 東條英機

文部大臣 橋田邦彦

國務大臣 鈴木貞一

農林大臣兼拓務大臣 井野碩哉

厚生大臣 小泉親彦

司法大臣 岩村通世

海軍大臣 嶋田繁太郎

外務大臣 東郷茂徳

逓信大臣 寺島健

大藏大臣 賀屋興宣

商工大臣 岸信介

鐵道大臣 八田嘉明

1890年10月30日發布

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

明治二八年（一八九五年）四月一七日下午關ニ於テ調印

明治二八年（一八九五年）四月二〇日批准

明治二八年（一八九五年）五月八日芝罘ニ於テ批准書交換

明治二八年（一八九五年）五月一三日公布

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ媾和條約ヲ訂結スル爲メニ大日本國皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位勲一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勲一等子爵陸奧宗光ヲ大清國皇帝陛下ハ太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章ニ品頂戴前出使大臣李經方ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

第一條 清國ハ朝鮮國ノ完全無●〔缶へんに欠ノケツ〕ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス因テ右獨立自主ヲ損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ

第二條 清國ハ左記ノ土地ノ主權竝ニ該地方ニ在ル城堡、兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス

一 左ノ經界内ニ在ル奉天省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城、海城、營口ニ互リ遼河口ニ至ル折線以南ノ地併セテ前記ノ各城市ヲ包含ス而シテ遼河ヲ以テ界トスル處ハ該河ノ中央ヲ以テ經界トスルコトヲ知ルヘシ

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼

二 臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼

三 澎湖列島即英國「グリーンウィチ」東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼

第三條 前條ニ掲載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ實地ニ就テ確定スル所アルヘキモノトス而シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラサルニ於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任スヘシ

該境界劃定委員ハ成ルヘク速ニ其ノ任務ニ從事シ其ノ任命後一箇年以内ニ之ヲ終了スヘシ

但シ該境界劃定委員ニ於テ更定スル所アルニ當リテ其ノ更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ掲記スル所ノ經界ヲ維持スヘシ

第四條 清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀二億兩ヲ日本國ニ支拂フヘキコトヲ約ス右金額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ毎回五千萬兩ヲ支拂フヘシ而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六箇月以内ニ次回ノ拂込ハ本約批准交換後十二箇月以内ニ於テスヘシ殘リノ金額ハ六箇年賦ニ分チ其ノ第一次ハ本約批准交換後二箇年以内ニ其ノ第二次ハ本約批准交換後三箇年以内ニ其ノ第三次ハ本約批准交換後四箇年以内ニ其ノ第四次ハ本約批准交換後五箇年以内ニ其ノ第五次ハ本約批准交換後六箇年以内ニ其ノ第六次ハ本約批准交換後七箇年以内ニ支拂フヘシ又初回拂込ノ期日ヨリ以後未タ拂込ヲ了ラサル額ニ對シテハ毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フヘキモノトス但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ全額或ハ其ノ幾分ヲ前以テ一時ニ支拂フコトヲ得ヘシ如シ本約批准交換後三箇年以内ニ該賠償金ノ總額ヲ皆濟スルトキハ總テ利子ヲ免除スヘシ若夫迄ニ二箇年半若ハ更ニ短期ノ利子ヲ拂込ミタルモノアルトキハ之ヲ元金ニ編入スヘシ

第五條 日本國ヘ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スルモノハ自由ニ其ノ所有不動産ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ヘシ其ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二箇年間ヲ猶豫スヘシ但シ右年限ノ滿チタルトキハ未タ該地方ヲ去ラサル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ日本國臣民ト視爲スコトアルヘシ

日清兩國政府ハ本約批准交換後直チニ各一名以上ノ委員ヲ臺灣省ヘ派遣シ該省ノ受渡ヲ爲スヘシ而シテ本約批准交換後二箇月以内ニ右受渡ヲ完了スヘシ

第六條 日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戦ノ爲メ消滅シタレハ清國ハ本約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スヘキコトヲ約ス而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎ト爲スヘシ又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府官吏商業航海陸路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フヘシ清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六箇月ノ後有效ノモノトス

第一 清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本國臣民ノ商業住居工業及製造業ノ爲メニ左ノ市港ヲ開クヘシ但シ現ニ清國ノ開市場開港場ニ行ハルル所ト同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スヘキモノトス

一 湖北省荊州府沙市

二 四川省重慶府

三 江蘇省蘇州府

四 浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス

第二 旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニ迄擴張スヘシ

一 揚子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル

二 上海ヨリ吳淞江及運河ニ入り蘇州杭州ニ至ル

日清兩國ニ於テ新章程ヲ妥定スル迄ハ前記航路ニ關シ適用シ得ヘキ限ハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スヘシ

第三 日本國臣民カ清國內地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲メ何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ルルノ權利ヲ有スヘシ

第四 日本國臣民ハ清國各開市場開港場ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ヘク又所定ノ輸入税ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ヘシ

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ内國運送税内地賦課金取立金ニ關シ又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民カ清國ヘ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ特典免除ヲ享有スヘキモノトス

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スヘキモノトス

第七條 現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後三箇月内ニ於テスヘシ但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フヘキモノトス

第八條 清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スヘキ擔保トシテ日本國軍隊ノ一時山東省威海衛ヲ占領スルコトヲ承諾ス而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ了リ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル時ニ當リテ清國政府ニテ右賠償金ノ殘額ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極ヲ立テ清國海關税ヲ以テ抵當ト爲スコトヲ承諾スルニ於テハ日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場處ヨリ撤回スヘシ若又之ニ關シ充分適當ナル取極立たサル場合ニハ該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタル時ニ非サレハ撤回セサルヘシ尤通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル後ニ非サレハ軍隊ノ撤回ヲ行ハサルモノト承知スヘシ

第九條 本約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ有ル所ノ俘虜ヲ還附スヘシ而シテ清國ハ日本國ヨリ斯ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若ハ處刑セサルヘキコトヲ約ス

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若ハ犯罪者ト認メラレタルモノハ清國ニ於テ直チニ解放スヘキコトヲ約シ清國ハ又交戰中日本國軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ爲サス又之ヲ爲サシメサルコトヲ約ス

第十條 本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スヘシ

第十一條 本約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セラルヘク而シテ右批准ハ芝罘ニ於テ明治二十八年五月八日即光緒二十一年四月十四日ニ交換セラルヘシ

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣

內閣總理大臣從二位勲一等伯爵

伊藤博文 （記名） 印

大日本帝國全權辦理大臣

外務大臣從二位勲一等子爵

陸奧宗光 （記名） 印

大清帝國欽差頭等全權大臣

太子太傅文華殿大學士北洋大臣

直隸總督一等肅毅伯

李鴻章 （記名） 印

大清帝國欽差全權大臣

二品頂戴前出使大臣

李經方 （記名） 印

（註）附屬地圖ハ之ヲ略ス

議定書

明治二八年（一八九五年）四月一七日下午ノ關ニ於テ署名

明治二八年（一八九五年）五月一三日公布

大日本國皇帝陛下ノ政府及大清國皇帝陛下ノ政府ハ本日調印シタル媾和條約中ノ意義ニ付將來誤解ヲ生スルコトヲ避ケムト欲スル目的ヲ以テ雙方ノ全權大臣ハ左ノ約定ニ同意セリ

第一、本日調印セシ媾和條約ニ附スル所ノ英譯文ハ該條約ノ日本文本文及漢文本文ト同一ノ意義ヲ有スルモノタル事ヲ約ス

第二、若該條約ノ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ前記英譯文ニ依テ決裁スヘキコトヲ約ス

第三、左ニ記名スル所ノ全權大臣ハ本議定書ハ本日調印シタル媾和條約ト同時ニ各兩帝國政府ニ提供シ而シテ該條約批准セラルルトキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セスシテ亦兩帝國政府ノ可認セシモノト看做スヘキコトヲ約ス

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣

内閣總理大臣從二位勲一等伯爵

伊藤博文 （記名） 印

大日本帝國全權辦理大臣

外務大臣從二位勲一等子爵

陸奧宗光 （記名） 印

大清帝國欽差頭等全權大臣

太子太傅文華殿大學士北洋

大臣直隸總督一等肅毅伯

李鴻章 （記名） 印

大清帝國欽差全權大臣

二品頂戴前出使大臣

李經方 （記名） 印

別約

明治二八年（一八九五年）四月一七日下午ノ關ニ於テ調印

明治二八年（一八九五年）四月二〇日批准

明治二八年（一八九五年）五月八日芝罘ニ於テ批准書交換

明治二八年（一八九五年）五月一三日公布

第一條 本日調印シタル媾和條約第八條ノ規定ニ依リテ一時威海衛ヲ占領スヘキ日本國軍隊ハ一旅團ヲ超過セサルヘシ而シテ該條約批准交換ノ日ヨリ清國ハ毎年右一時占領ニ關スル費用ノ四分ノ一庫平銀五十萬兩ヲ支拂フヘシ

第二條 威海衛ニ於ケル一時占領地ハ劉公嶋及威海衛灣ノ全沿岸ヨリ日本里數五里ヲ以テ其ノ區域ト爲スヘシ

右一時占領地ノ經界線ヲ距ルコト日本里數五里ノ地内ニ在リテハ何レノ所タリトモ清國軍隊ノ之ニ近ツキ若ハ之ヲ占領スルコトヲ許ササルヘシ

第三條 一時占領地ノ行政事務ハ仍ホ清國官吏ノ管理ニ歸スルモノトス但シ清國官吏ハ常ニ日本國占領軍司令官カ其ノ軍隊ノ健康安全紀律ニ關シ又ハ之カ維持配置上ニ付必要ト認メ發スル所ノ命令ニ服從スヘキ義務アルモノトス

一時占領地内ニ於テ犯シタル一切ノ軍事上ノ罪科ハ日本國軍務官ノ裁判管轄ニ屬スルモノトス

此ノ別約ハ本日調印シタル媾和條約中ニ悉ク記入シタルト同一效力ヲ有スルモノトス

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣

內閣總理大臣從二位勲一等伯爵

伊藤博文 （記名） 印

大日本帝國全權辦理大臣

外務大臣從二位勲一等子爵

陸奧宗光 （記名） 印

大清帝國欽差頭等全權大臣

太子太傅文華殿大學士北洋

大臣直隸總督一等肅毅伯

李鴻章 （記名） 印

大清帝國欽差全權大臣

二品頂戴前出使大臣

李經方 （記名） 印

<https://worldjpn.net/documents/texts/pw/19220206.T1J.html>

一九二二年（大正十一年）二月六日華盛頓ニ於テ署名調印

同年八月五日批准

一九二三年（大正十二年）八月一七日華盛頓ニ於テ批准書寄託

同年同月同日公布

同年同月同日實施

亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國、伊太利國及日本國ハ

一般ノ平和ノ維持ニ貢獻シ且軍備競争ノ負擔ヲ輕減セシムルコトヲ望ミ

右目的ヲ達成スル爲各自ノ海軍軍備ヲ制限スルノ條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

亞米利加合衆國大統領

合衆國人民「チアールス、エヴァンス、ヒューズ」

同「ヘンリー、カボット、ロツジ」

同「オスカー、ダブリュー、アンダウッド」

同「エリヒュー、ルート」

大不列顛愛蘭聯合王國及大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛下

樞密院議長國會議員「アーサー、ジェームス、バルフォア」

海軍大臣男爵「リー、オヴ、フェアラム」

亞米利加合衆國駐割特命全權大使「サー、オークランド、キアンプル、ゲデス」

加奈陀

「ロバート、レアド、ボーデン」

濠太利聯邦

內務大臣上院議員「ジョージ、フォスター、ピアス」

新西蘭

新西蘭最高法院判事「サー、ジョン、ウィリアム、サルモンド」

南阿弗利加聯邦

國會議員「アーサー、ジェームス、バルフォア」

印度

印度參議院議員「ヴァリングマン、サンカラナラヤナ、スリニヴァサ、サストリ」

佛蘭西共和國大統領

殖民大臣下院議員「アルベール、サロー」

亞米利加合衆國駐割特命全權大使「ジュール、ジー、ジュスラン」

伊太利國皇帝陛下

參議院議員「カルロ、シアンツェル」

亞米利加合衆國駐割特命全權大使參議院議員「ヴィットリオ、ロランディ、リッチ」

參議院議員「ルイジ、アルベルティニ」

日本國皇帝陛下

海軍大臣男爵加藤友三郎

亞米利加合衆國駐割特命全權大使男爵幣原喜重郎

外務次官埴原正直

右各委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ如ク協定セリ

第一章

海軍軍備ノ制限ニ關スル一般規定

第一條 締約國ハ本條約ノ規定ニ從ヒ各自ノ海軍軍備ヲ制限スヘキコトヲ約定ス

第二條 締約國ハ第二章第一節ニ掲クル主力艦ヲ各自保有スルコトヲ得本條約實施ノ上ハ合衆國、英帝國及日本國ノ既成又ハ建造中ノ他ノ一切ノ主力艦ハ第二章第二節ノ規定ニ從ヒ之ヲ處分スヘシ但シ本條中ノ左ノ諸規定ヲ留保ス

合衆國ハ第二章第一節ニ掲クル主力艦ノ外現ニ建造中ノ「ウェスト、ヴァージニア」級ニ隻ヲ完成シ之ヲ保有スルコトヲ得右ニ隻完成ノ上ハ「ノース、ダコータ」及「デラウエーア」ハ第二章第二節ノ規定ニ從ヒ之ヲ處分スヘシ

英帝國ハ第二章第三節ノ代換表ニ從ヒ基準排水量各三萬五千噸（三萬五千五百六十「メートル」式噸）ヲ超エサル新主力艦ニ隻ヲ建造スルコトヲ得右ニ隻完成ノ上ハ「サンダラー」、「キング、ジョージ」五世、「エージアックス」及「センチュリーオン」ハ第二章第二節ノ規定ニ從ヒ之ヲ處分スヘシ

第三條 第二條ノ規定ヲ留保シ締約國ハ各自ノ主力艦建造計畫ヲ廢止スヘク又締約國ハ第二章第三節ニ掲クル所ニ從ヒ建造シ又ハ取得スルコトヲ得ヘキ代換噸數以外ニ新主力艦ヲ建造シ又ハ取得スルコトヲ得ス

第二章第三節ニ從ヒ代換セラレタル軍艦ハ同章第二節ノ規定ニ從ヒ之ヲ處分スヘシ

第四條 各締約國ノ主力艦合計代換噸數ハ基準排水量ニ於テ合衆國五十二萬五千噸（五十三萬三千四百「メートル」式噸）、英帝國五十二萬五千噸（五十三萬三千四百「メートル」式噸）、佛蘭西國十七萬五千噸（十七萬七千八百「メートル」式噸）、伊太利國十七萬五千噸（十七萬七千八百「メートル」式噸）、日本國三十一萬五千噸（三十二萬四千「メートル」式噸）ヲ超ユルコトヲ得ス

第五條 基準排水量三萬五千噸（三萬五千五百六十「メートル」式噸）ヲ超ユル主力艦ハ何レノ締約國モ之ヲ取得シ又ハ之ヲ建造シ、建造セシメ若ハ其ノ法域内ニ於テ之ヲ建造ヲ許スコトヲ得ス

第六條 何レノ締約國ノ主力艦モ口徑十六吋（四百六「ミリメートル」）ヲ超ユル砲ヲ裝備スルコトヲ得ス

第七條 各締約國ノ航空母艦合計噸數ハ基準排水量ニ於テ合衆國十三萬五千噸（十三萬七千六百六十「メートル」式噸）、英帝國十三萬五千噸（十三萬七千六百六十「メートル」式噸）、佛蘭西國六萬噸（六萬九百六十「メートル」式噸）、伊太利國六萬噸（六萬九百六十「メートル」式噸）、日本國八萬一千噸（八萬二千二百九十六「メートル」式噸）ヲ超ユルコトヲ得ス

第八條 航空母艦ノ代換ハ第二章第三節ノ規定ニ從フノ外之ヲ行フコトヲ得ス但シ千九百二十一年十一月十二日ニ現存シ又ハ建造中ノ一切ノ航空母艦ハ之ヲ試驗的ノモノト看做スヘク且其ノ艦齡ノ如何ニ拘ラス第七條ニ規定スル合計噸數ノ範圍内ニ於テ之ヲ代換スルコトヲ得

第九條 基準排水量二萬七千噸（二萬七千四百三十二「メートル」式噸）ヲ超ユル航空母艦ハ何レノ締約國モ之ヲ取得シ又ハ之ヲ建造シ、建造セシメ若ハ其ノ法域内ニ於テ之ヲ建造ヲ許スコトヲ得ス

尤モ各締約國ハ其ノ航空母艦ノ割當合計噸數ヲ超エサル限り基準排水量各三萬三千噸（三萬三千五百二十八「メートル」式噸）ヲ超エサル航空母艦二隻以内ヲ建造スルコトヲ得ヘク又經費節約ノ爲各締約國ハ第二條ノ規定ニ依リ廢棄スヘキ既成又ハ建造中ノ主力艦中ノ二隻ヲ右目的ニ利用スルコトヲ得基準排水量二萬七千噸（二萬七千四百三十二「メートル」式噸）ヲ超ユル航空母艦ノ武装ハ第十條ノ規定ニ準據スヘシ但シ備砲中ニ口徑六吋（百五十二「ミリメートル」）ヲ超ユルモノアルトキハ航空機防禦砲及口徑五吋（百二十七「ミリメートル」）以下ノ砲ヲ除クノ外備砲ノ數ハ合計八門ヲ超ユルコトヲ得ス

第十條 何レノ締約國ノ航空母艦モ口徑八吋（二百三「ミリメートル」）ヲ超ユル砲ヲ裝備スルコトヲ得ス備砲中ニ口徑六吋（百五十二「ミリメートル」）ヲ超ユルモノアルトキハ航空機防禦砲及口徑五吋（百二十七「ミリメートル」）以下ノ砲ヲ除クノ外備砲ノ數ハ

合計十門ヲ超ユルコトヲ得ス但シ第九條ノ規定ノ適用ヲ妨クルコトナシ又備砲中ニ口径六吋（百五十二「ミリメートル」）ヲ超ユルモノナキトキハ砲ノ數ハ制限セラルルコトナシ

右何レノ場合ニ於テモ航空機防禦砲及口径五吋（百二十七「ミリメートル」）ヲ超エサル砲ノ數ハ制限セラルルコトナシ

第十一條 主力艦又ハ航空母艦以外ノ軍艦ニシテ基準排水量一萬噸（一萬百六十「メートル」式噸）ヲ超ユルモノハ何レノ締約國モ之ヲ取得シ又ハ之ヲ建造シ、建造セシメ若ハ其ノ法域内ニ於テ之カ建造ヲ許スコトヲ得ス特ニ戰鬪用艦船トシテ建造セラレタルモノニ非サル船舶又ハ戰鬪用トシテ平時政府ノ管理ノ下ニ置カレタルモノニ非サル船舶ニシテ艦隊要務又ハ軍隊輸送ノ爲其ノ他戰鬪用艦船トシテ爲ス以外ニ於テ敵對行爲ノ遂行ヲ幫助スル爲使用セラルルモノハ本條ノ制限ヲ受ケサルモノトス

第十二條 將來起工セラルヘキ何レノ締約國ノ軍艦モ主力艦ヲ除クノ外口径八吋（二百三「ミリメートル」）ヲ超ユル砲ヲ裝備スルコトヲ得ス

第十三條 第九條ニ規定スル場合ヲ除クノ外本條約中ニ廢棄スヘキモノトシテ指定セラレタル軍艦ハ再ヒ之ヲ軍艦ニ變更スルコトヲ得ス

第十四條 商船ハ軍艦ニ變更スルノ目的ヲ以テ平時之ニ武装ヲ施スノ準備ヲ爲スコトヲ得ス但シ口径六吋（百五十二「ミリメートル」）ヲ超エサル砲ヲ裝備スル爲必要ナル甲板ノ補強設備ハ此ノ限ニ在ラス

第十五條 何レノ締約國ノ法域内ニ於テ非締約國ノ爲ニ建造スル軍艦モ締約國ノ建造シ又ハ建造セシムル同型ノ軍艦ニ付本條約ニ規定スル排水量及武装ニ關スル制限ヲ超ユルコトヲ得ス但シ非締約國ノ爲ニ建造スル航空母艦ノ排水量ハ如何ナル場合ニ於テモ基準排水量二萬七千噸（二萬七千四百三十二「メートル」式噸）ヲ超ユルコトヲ得ス

第十六條 締約國ノ法域内ニ於テ非締約國ノ爲ニ軍艦ヲ建造スルトキハ該締約國ハ他ノ締約國ニ對シ契約締結ノ日及軍艦ノ龍骨据附ノ日ヲ速ニ通報シ且第二章第三節第一款（ロ）ノ（四）及（五）ニ規定スル軍艦ニ關スル細目ヲ通知スヘシ

第十七條 締約國ハ戰爭ニ從事スル場合ニ於テハ其ノ法域内ニ於テ他國ノ爲ニ建造中ノ軍艦又ハ其ノ法域内ニ於テ他國ノ爲ニ建造シタルモノ引渡ヲ了セサル軍艦ヲ軍艦トシテ使用スルコトヲ得ス

第十八條 各締約國ハ贈與、賣却又ハ如何ナル讓渡ノ形式ニ依ルヲ問ハス外國海軍ニ於テ軍艦ト爲スヲ得ルカ如キ方法ニ依リ其ノ軍艦ヲ處分セサルヘキコトヲ約ス

第十九條 合衆國、英帝國及日本國ハ左

大正一一年（一九二二年）二月四日「ワシントン」ニ於テ調印

大正一一年（一九二二年）五月二三日批准

大正一一年（一九二二年）六月二日北京ニ於テ批准

書交換

大正一一年（一九二二年）六月二日公布

日本國及支那國ハ共ニ山東ニ關スル懸案ヲ友誼的ニ且兩國ノ共同利益ニ適應シテ解決セム
トスル眞摯ナル希望ニ促サレ該懸案解決ノ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲左ノ如ク其
ノ全權委員ヲ任命セリ

日本國皇帝陛下

海軍大臣男爵 加藤友三郎

特命全權大使男爵 幣原喜重郎

外務次官 埴原正直

支那共和國大總統閣下

特命全權公使 施肇基

特命全權公使 顧維鈞

前司法大臣 王寵惠

因テ各委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セ
リ

第一章

舊獨逸膠州租借地ノ還付

第一條 日本國ハ舊獨逸膠州租借地ヲ支那國ニ還付スヘシ

第二條 日本國政府及支那共和國政府ハ舊獨逸膠州租借地ノ行政ノ移轉及該地域内ノ公有
財産ノ移轉ニ關スル細目ノ取極ヲ作成實施シ且均シク調整ヲ要スル他ノ事項ヲ解決スルノ
權限ヲ有スル共同委員會ヲ組織スル爲各三名ノ委員ヲ任命スヘシ

共同委員會ハ前記ノ目的ノ爲本條約實施後直ニ會合スヘシ

第三條 舊獨逸膠州租借地ノ行政ノ移轉及該地域内ノ公有財産ノ移轉竝前條ニ定ムル他ノ事項ノ調整ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ本條約實施ノ日ヨリ六月ヲ超エサル間ニ完了スヘシ

第四條 日本國政府ハ舊獨逸膠州租借地ノ行政ヲ支那國ニ移轉スルニ際シ右行政ノ移轉ニ必要ナルヘキ日本國所持ノ記録、登録簿、圖面、證書其ノ他ノ文書又ハ右ノ認證謄本竝支那國カ爾後該地域及膠州灣ノ周圍五十基米地帶ノ行政ヲ爲スニ付有用ナルヘキ前記書類ヲ支那共和國政府ニ付引渡スコトヲ約ス

第二章

公有財産ノ移轉

第五條 日本國政府ハ舊獨逸膠州租借地内ノ一切ノ公有財産（土地、建物、工場又ハ營造物ヲ含ム）ハ嘗テ獨逸國官憲カ所有シタルモノナルト該地域ノ日本國行政ノ期間内ニ日本國官憲カ買收シ又ハ建造シタルモノナルトヲ問ハス之ヲ支那共和國政府ニ移轉スルコトヲ約ス但シ本條約第七條ニ規定スルモノハ此ノ限ニ在ラス

第六條 前條ニ依ル公有財産ノ移轉ニ付テハ支那共和國政府ハ何等補償ヲ要求セラルルコトナカルヘシ尤モ日本國官憲カ買收又ハ建造シタルモノニ付及嘗テ獨逸國官憲カ所有シタルモノニ對スル改良又ハ添加ニ付テハ支那共和國政府ハ日本國政府カ現實ニ支出シタル費用ニ對シ減損及存續價格ノ原則ヲ考量シ公正且衡平ナル額ヲ償還スヘシ

第七條 舊獨逸膠州租借地内ノ公有財産中青島ニ設置セラルヘキ日本國領事館ノ爲必要ナルモノハ日本國政府之ヲ保有スヘク又日本人居留民團體ノ福祉ノ爲特ニ必要ナルモノ（公立學校、神社及墓地ヲ含ム）ハ右居留民團體ニ保有セシムヘシ

第八條 前三條ニ掲クル事項ノ細目ハ本條約第二條ニ規定スル共同委員會之ヲ協定スヘシ

第三章

日本國軍隊ノ撤退

第九條 青島濟南府鐵道及其ノ支線ノ沿線ニ現在駐屯セル日本國軍隊（憲兵ヲ含ム）ハ支那國ノ巡警又ハ軍隊カ該鐵道ノ保護ヲ引受クル爲派遣セラルルニ至ラハ直ニ撤退スヘシ

第十條 前條ニ規定スル支那國ノ巡警又ハ軍隊ノ配置及日本國軍隊ノ撤退ハ區間ヲ分チテ之ヲ行フコトヲ得

各區間ニ於ケル右手續ノ完了期日ハ日本國及支那國當該官憲ノ間ニ豫メ之ヲ協定スヘシ

右日本國軍隊ノ全部撤退ハ本條約署名ノ日ヨリ成ルヘク三月内ニ且如何ナル場合ニ於テモ六月ヲ超エサル間ニ之ヲ實行スヘシ

第十一條 青島ニ於ケル日本國守備隊ハ成ルヘク舊獨逸膠州租借地ノ行政ヲ支那ニ移轉スルト同時ニ且如何ナル場合ニ於テモ右移轉ノ日ヨリ三十日ヲ超エサル間ニ全部撤退スヘシ

第四章

青島海關

第十二條 青島稅關ハ本條約ノ實施ト共ニ全然支那海關ノ一部ト爲ルヘシ

第十三條 青島支那海關ノ再開ニ關スル千九百十五年八月六日ノ日支暫行取極ハ本條約ノ實施ト共ニ其ノ効力ヲ失フヘシ

第五章

青島濟南府鐵道

第十四條 日本國ハ青島濟南府鐵道及其ノ支線ヲ之ニ附屬スル他ノ一切ノ財産（埠頭、倉庫及他ノ同種ノ財産ヲ含ム）ト共ニ支那國ニ移轉スヘシ

第十五條 支那國ハ前條ニ掲クル一切ノ鐵道財産ノ現實價格ヲ日本國ニ償却スルコトヲ約ス

右償却セラルヘキ現實價格トハ五千參百四拾萬六千百四拾壹（五參、四〇六、壹四壹）金貨「麻」（前掲財産中獨逸人ノ遺留セル部分ノ査定額）又ハ其ノ相當額ニ日本國カ右鐵道ノ管理中前掲財産ニ加ヘタル永久的ノ改良又ハ添加ノ爲現實ニ支出シタル額（相當ノ減損價格ヲ控除ス）ヲ加ヘタルモノトス

前條ニ掲クル埠頭、倉庫及他ノ同種ノ財産ニ關シテハ日本國カ鐵道管理中之ニ加ヘタル永久的ノ改良又ハ添加ノ費用（相當ノ減損價格ヲ控除ス）ヲ除クノ外何等ノ負擔ヲ課セサルモノトス

第十六條 日本國政府及支那共和國政府ハ前條ニ定ムル基礎ニ依リ鐵道財産ノ現實價格ヲ評價シ且右財産ノ移轉ヲ協定スルノ權限ヲ有スル鐵道共同委員會ヲ組織スル爲各三名ノ委員ヲ任命スヘシ

第十七條 本條約第十四條ニ依ル一切ノ鐵道財産ノ移轉ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ本條約實施ノ日ヨリ九月ヲ超エサル間ニ之ヲ完了スヘシ

第十八條 本條約第十五條ニ依ル償却ヲ實行スル爲支那國ハ鐵道財産ノ移轉完了ト同時ニ支那國政府ノ國庫證券ヲ日本國ニ交付スヘシ該國庫證券ハ鐵道ノ財産及收入ヲ擔保トシ其ノ期限ハ十五年トスルモ支那國ノ選擇ニ依リ右證券交付ノ日ヨリ五年ノ終ニ又ハ其ノ後何時ニテモ六月ノ豫告ヲ以テ全部又ハ一部ヲ償却スルコトヲ得ヘキモノトス

第十九條 前條ニ依ル國庫證券ノ償還期限中支那共和國政府ハ該國庫證券ノ一部ニテモ償還セラレサル間ハ日本國臣民一名ヲ運輸主任ニ、他ノ日本國臣民一名ヲ支那會計主任ト共同シ且對等ノ職權ヲ有スル會計主任ニ選擇採任用スヘシ

前項ノ職員ハ總テ支那管理局長ノ指揮、管理及監督ノ下ニ屬スヘク正當理由ニ因リ免セラルルコトアルヘシ

第二十條 前紀國庫證券ニ關スル專門的ナル財政上ノ細目ニシテ本章ニ規定セサルモノハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ本條約實施ノ日ヨリ六月ヲ超エサル間ニ日本國及支那國ノ官憲ニ於テ協同シテ之ヲ決定スヘシ

第六章

青島濟南府鐵道ノ延長線

第二十一條 青島濟南府鐵道ノ二延長線即チ濟南府順德線及高密徐州府線ニ關スル特權ハ支那共和國政府及國際財業團間ニ協定セラルヘキ條件ニ從ヒ右財業團ノ共同事業ニ開放セラルヘシ

第七章

鑛山

第二十二條 曩ニ支那國カ獨逸國ニ採掘權ヲ許與シタル淄川、坊子及金嶺鎮ノ鑛山ハ支那共和國政府ノ特許ニ依リ設立セラルヘキ會社ニ引渡サルヘク同會社ニ對スル日本側ノ出資額ハ支那側ノ出資額ヲ超過スヘカラス

右取極ノ様式及條件ハ本條約第二條ニ規定スル共同委員會之ヲ定ムヘシ

第八章

舊獨逸膠州租借地ノ開放

第二十三條 日本國政府ハ舊獨逸膠州租借地ニ於テ日本專管居留地又ハ國際居留地ノ設置ヲ要求セサルヘキコトヲ聲明ス

支那共和國政府ハ之ニ對シ舊獨逸膠州租借地全地域ヲ外國貿易ノ爲ニ開放スヘキコト及外國人ハ右地域内ニ於テ自由ニ居住シ且商業、工業其ノ他一切ノ合法ノ業務ニ従事スルコトヲ許サルヘキコトヲ聲明ス

第二十四條 支那共和國政府ハ舊獨逸膠州租借地ニ於テ外國人カ獨逸國施設ノ下ニ於ケルト日本國行政ノ期間内ニ於ケルトヲ問ハス合法且公正ニ取得シタル既得權ヲ尊重スヘキコトヲ併セテ聲明ス

日本國臣民又ハ日本會社ノ取得シタル右既得權ノ地位又ハ効力ニ關スル一切ノ問題ハ本條約第二條ニ規定スル共同委員會之ヲ調整スヘシ

第九章

製鹽業

第二十五條 支那國ニ於テ製鹽業ハ政府ノ專賣事業ニ屬スルニ鑑ミ膠州灣沿岸ニ於テ現ニ右事業ニ従事スル日本國臣民又ハ日本會社ノ利益ハ公正ナル補償ヲ支拂ヒテ支那共和國政府之ヲ買收スヘク且前記沿岸ニ於ケル諸事業ノ產出ニ係ル一定量ノ鹽ヲ日本國ニ輸出スルコトハ適當ノ條件ヲ以テ之ヲ許可スヘキコトニ協定ス

前記利益ヲ支那共和國政府ニ移轉スルコトヲ含ム前項目的ノ爲ニスル取極ハ本條約第二條ニ規定スル共同委員會之ヲ作成スヘシ右取極ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ本條約實施ノ日ヨリ六月ヲ超エサル間ニ之ヲ完了スヘシ

第十章

海底電信線

第二十六條 日本國政府ハ青島芝罘間及青島上海間ノ舊獨逸海底電信線ニ關スル一切ノ權利、權原及特權ハ右兩線中日本國政府カ青島佐世保間ノ海底電信線敷設ノ爲ニ利用シタル部分ヲ除クノ外支那國ニ歸屬スルコトヲ聲明ス尤モ前記青島佐世保間ノ海底電信線ノ青島ニ於ケル陸揚及運用ニ關スル問題ハ支那國ヲ一方ノ當事者トスル現存契約ノ條件ヲ留保シ本條約第二條ニ規定スル共同委員會之ヲ調整スヘキモノトス

第十一章

無線電信局

第二十七條 日本國政府ハ青島及濟南府ニ於ケル日本無線電信局ハ前記兩地ニ於ケル各日本國軍隊ノ撤退ト共ニ此等無線電信局ノ價格ニ對シ公正ナル補償ヲ得テ之ヲ支那共和國政府ニ移轉スルコトヲ約ス

右ノ移轉及補償ニ關スル細目ハ本條約第二條ニ規定スル共同委員會之ヲ協定スヘシ

第二十八條 本條約（附屬書ヲ含ム）ハ批准ヲ要ス其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ且署名ノ日ヨリ四月ヲ超エサル間ニ北京ニ於テ之ヲ交換スヘシ

本條約ハ批准書交換ノ日ヨリ實施セラルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ英吉利語ノ本條約ニ通ニ署名調印ス

千九百二十二年二月四日華盛頓市ニ於テ之ヲ作成ス

加藤友三郎（印）

幣原喜重郎（印）

埴原正直（印）

施肇基（印）

顧維鈞（印）

王寵惠（印）

附屬書

一 優先權ノ拋棄

日本國政府ハ千八百九十八年三月六日ノ支那國及獨逸國間ノ條約ニ規定スル人、資本及材料ヲ以テスル外國ノ助力ニ關スル一切ノ優先權ヲ拋棄スルコトヲ聲明ス

二 公有財産ノ移轉

本條約第五條ニ依リ支那共和國政府ニ移轉セラルヘキ公有財産中ニハ（一）道路、水道、公園、下水及衛生設備ノ如キ一切ノ公共施設（二）電話、電燈、屠殺場及洗濯所ニ關スルモノノ如キ一切ノ公共企業ヲ含ムモノトス

支那共和國政府ハ前項ニ依リ同政府ニ移轉セラルヘキ公共施設ノ經營及維持ニ付舊獨逸膠州租借地内ノ外國居留民團體ニ公正ナル代表權ヲ有セシムヘキコトヲ聲明ス

支那共和國政府ハ舊獨逸膠州租借地ニ於ケル電話企業ヲ引受ケタル上ハ公衆ノ一般利益上當然要求セラルヘキ該企業ノ擴張及改良ニ關シ該地域内ノ外國居留民團體ノ爲ス要求ニ付相當ノ考量ヲ加フヘキコトヲ併セテ聲明ス

電燈、屠殺場及洗濯所ニ關スル公共企業ニ付テハ支那共和國政府ハ其ノ引受後之ヲ青島ニ於ケル支那市政機關ニ引渡スヘク該市政機關ハ更ニ市ノ規則及監督ノ下ニ右企業ノ經營運用ニ當ラシムル爲支那國法令ニ從ヒ商事會社ヲ設立セシムヘシ

三 青島海關

支那共和國政府ハ支那海關總辦ニ對シ（一）舊獨逸膠州租借地ニ於ケル日本商人ニ對シ日本語ヲ用キテ青島稅關ト往復スルコトヲ許可スヘキコト（二）右稅關ニ必要ナル役員ヲ選擇スルニ當リテハ支那海關ノ現行任用規則ノ許ス限り青島ニ於ケル商業上ノ諸般ノ必要ヲ考量スヘキコトヲ訓令スルコトヲ聲明ス

四 青島濟南府鐵道

本條約第十六條ニ規定スル鐵道共同委員會ニ於テ其ノ權限内ニ在ル事項ニ關シ協定ヲ見ルニ至ラサルトキハ日本國政府及支那共和國政府ハ右係爭事項ヲ引取り外交手段ニ依リ之ヲ商議調整スヘシ右係爭事項ノ決定ニ當リ日本國政府及支那共和國政府ハ必要アルトキハ兩國政府協同シテ指名スル第三國（一國又ハ數國）ノ專門家ノ勸告ヲ求ムヘシ

五 芝罘濰縣鐵道

日本國政府ハ芝罘濰縣鐵道カ支那側資本ヲ以テ建設セラルル限り同鐵道ニ對スル資本供給ノ選擇權ヲ國際財業團ノ共同事業ニ開放スヘキコトヲ要求セサルヘシ

六 舊獨逸膠州租借地ノ開放

支那共和國政府ハ支那國ニ於ケル地方自治制度ヲ定ムル法令ノ制定及其ノ一般的適用ヲ見ルニ至ル迄ハ舊獨逸膠州租借地内ノ外國居留民ノ福祉及利益ニ直接ノ影響アルヘキ市政事項ニ付支那地方官憲カ該居留民ノ意見ヲ確ムヘキコトヲ聲明ス

加藤友三郎

幣原喜重郎

埴原正直

施肇基

顧維鈞

王寵惠

一、近衛内閣成立後ノ外務大臣トノ第一回會見ニ於テクレイグ大使ハ新内閣モ前内閣ト同様協力ノ精神ニ依リ友誼的手段ヲ以テ兩國ノ關係ニ對處セラレンコトノ希望ヲ述ヘタルニ對シ松岡外相ハ目下將來ニ關スル全體ノ御方針ヲ慎重考究中ナルコトヲ答ヘラレ其ノ際非公式ノ意思トシテ日英間ニ於テハ日英關係ノ全般的改善ヲ希望スルコトヲ得ス日英關係ノ今後ノ緊張ハ已ムヲ得サル旨ヲ述ヘラレタリ。

右會見ノ後二日ヲ經テ日本及朝鮮ニ於ケル多數英人逮捕ノ問題起リ之ニ對シ陸相及法相ノ共同聲明發セラレ一般ニ英國ノスパイ網日本ニ存スルノ印象ヲ與ヘタルカ裁判ノ結果ハ其ノ罰セラレ居ルコトハ些細ナルコトニテ眞ニスパイノ事ハナカリキ。

以上ハ七、八月ノ概況ナルカ九月ニ至リ日本ハ三國同盟ヲ締結シ公然英ノ敵タル獨伊ノ側ニ投スルニ至リ政治家ノ公ノ演說及新聞論調モ英國側ニ對シテ益々疑惑（アंकサイエテイ）ヲ深カラシムルニ至レリ。

二、松岡外相ノ公ノ聲明ハ三國同盟ハ平和ノ爲ノ「アクト」ナリト言ハレ貴大使モ支那問題ノ困難ヲ克服シテ東亞ニ於ケル秩序ヲ回復スルコトカ日本ノ主タル方針ナリト言ハレタルカ其ノ後發生セル事實ヨリ判斷シ尙日本ヲ「ドミネイト」セン爲ニ其ノ勢力範圍ヲ擴張シツツアル總テノ兆候ヨリ見テ以上ノ説明ハ率直ニ諒解ニ苦シム所ナリ。

此ノ點ニ關シ英國政府ハ松岡外相カビルマニ對シ日本ノアスピレイションニ付不適當ナ言辭ナリト思考シ居ル點注意ヲ喚起シ度シ。次ニ印度支那及タイ國ノ問題ニ付テモ最近ノ事態ハ何等極東ニ於ケル緊張ヲ緩和スルニ至ラス松岡外相ハ極東ニ於ケル紛爭ハ日本ノミカ調停スルノ權利アリト言ハレタルカ、右ノクレイムハ英政府ノ承認シ得サル所ナリ。

若シ仲裁ノ目的カ單ニ紛爭ノ解決ヲ齎スモノナラハ勿論英國モ總テノ他ノ國ト同様歡迎スヘキナリ。然レトモ日本カ佛印及タイニ壓迫ヲ加ヘタリトノ不穩ナル報告アリ。此ノ調停カ此等兩國ヨリ遠大ナル政治上及軍事上ノコンセツションヲ確保スル口實ニ用ヒラレ居ルニ非スヤトノ疑惑ヲ持ツニ至レリ。例ヘハ新聞情報カカムラン灣及總テノ現存飛行場ハ日本ノ使用ニ供セラルト報セルカ如シ。

三、最モ重要ナル點ハ最近ク大使ノ報告ニシテ同大使ハ「日本ニ於テハ極東ノ危局カ茲二三週間中ニ發生セントノ一般的感想アリ」ト、報告シ來タレリ。

右ハ如何ナル事ヲ意味スルヤ何人カ何人ニ對シ挑戰スルモノナリヤ日本ニ依リ企テラレ居ル或ル種ノ前進カ英本國ニ對スル獨ノ攻勢ト同時ニ行ハルル事ト信スヘキヤ若シ然リトセハ英國ハ極東ニ於ケル英ノ領土カ日本ノ攻撃ノ危險ニ瀕シ居レリト認ムヘキヤ、事態ハ自分ノ諒解ニ苦ム所ナリ日本ハ地理的ニ有利ナル位置ヲ有シ、若シ欲スルニ於テハ戰禍ヨリ全然離レ得ル譯ニテ又日本ハ何人ヨリモ特ニ英國ヨリハ脅迫ヲ受ケ居ラス。

若シ自分ニ忌憚ナキ言ヲ許サルルナラハ日本カ支那事變四年ノ後更ニ他ノ戰爭ニ介入セサルヲ可トスルノ多クノ理由ヲ持ツ様思ハル。自分ノ考ニテハ日本ハ英國及米國ト非友誼的ノ間柄ニ在ルノ理由ハ之ヲ認メサルニ非サルモ歴史ノ證明スルカ如ク日本ノ繁榮ハ英米

ト良好ノ關係ニアル場合最モ著シカリシコトハ爭ハレサル所ナリ。クレギー大使カ日本ニ於テ危機ノ範圍増加シツツアルコトヲ報告シ來レル理由ヲ了解スルニ苦ム位ナリ。日本政治家ノ目的トスル所ハ或大ナル混亂カ迫リ居ルコトヲ示サントスルモノノ如ク見ユ。

四、上記ノ如キ徵候及警報ヲ無視スルコトノ不可能ニシテ其ノ立場ヲ明瞭ニ御話スルノ必要モ了解セラルヘシ。英國ハ極東ニ於テ領土ヲ有スルカ英國ハ何等侵略的行爲ノ意圖ヲ有セサルモ如何ナル他ノ國ノ指令ニヨリテモ之等領域ヲ犠牲ニスルノ意圖ヲ有セス、尙日本ノミカ極東ニ於ケル凡テノ住民（英人ヲモ含ム）ノ運命ヲ管理支配スルノ權利ヲ有ストノ原則ヲ容認スルコトハ不可能ナリ。英ハ極東ニ於ケル領域ニ於テ住民ノ安全及福祉ニ對シ英ノ領土ニシテ攻撃ヲ受クル場合何人モ吾人カ極力（ウイズ・アトモスト・ヴイガー）防禦スルモノナルコトヲ疑フヘカラス。

五、尙更ニ二ツノ點ヲ述ヘタシ

第一ノ點ハ日本カ日本自身ノ政策ヲ決定スヘキコトハ素ヨリ異存ナキカ若シ舊友且昔ノ同盟國トシテ次ノ如キ事ヲ言フモ日本ノ怒ヲ買フコトナカルヘシト存ス。即チ自分ハ日本ノ行ハントスル政策カ恐ルヘキ不幸（テリブル・デイザスター）ニ進マサランコトヲ希望シ祈願スルモノナリ。尙日本カ獨伊ト協力スルコトニ於テ過去ニ於テ莫大ナル國力ト繁榮トヲ作り上ケタル其ノ賢明ナル用意健全ナル判斷ヲ喪失セサランコトヲ希望シテ止マス。

第二ノ點ハ戰局ニ關シ英國ニ有利ナル報道カ日本ニ於テハ押ヘラレ英ハ沒落ニ瀕セルデカダンナリトノ思想カ唱道セラルルトノコトナルカ貴下ノ御承知ノ通り今日ノ英國人ノ眞ノスピリットハ左様ナモノニ非ス英帝國全部ニ亘リ絶對的ニ舉國一致ノ強キ決意ヲ有シ居ルノミナラス英國ハ大ナル資源ヲ有シ且米國ノ制限ナキ援助ヲ得居リ、如何ナル場合ニ於テモ此ノ鬭爭ニ失敗スルコトナキハ明瞭ナリ。獨逸側ハ此ノ島帝國ヲ征服シ得ルコトヲ誇張シ居ルモ吾人ハ其ノ失敗ヲ確信シ居レリ。昨年九月ニモ吾人ハ危機ヲ避ケ得タリ。今日ハ陸上海上空中ニ於テ英ノ力ハ其ノ當時ヨリモ遙ニ威力ヲ増シタリ。獨カ英征服ノ企圖失敗シ戰爭ニ敗ルルコトハ英國民ノ確信スル所ナリ。

明治四十三年八月二十九日官報掲載

韓國併合ノ件ニ關シ帝國政府ハ韓國トノ間ニ條約ヲ有シ又ハ韓國ニ於テ最惠國待遇ヲ享クヘキコトトナリ居リタル獨逸國、亞米利加合衆國、奧地利洪牙利國、白耳義國、清國、丁抹國、佛蘭西國、大不列顛國、伊太利國及露西亞國ノ各政府ニ對シ左ノ宣言ヲ爲シタリ

明治三十八年日韓協約成リテヨリ茲ニ四年有餘其ノ間日韓兩國政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ從事シタリト雖同國現在ノ統治制度ハ尚未タ十分ニ公共ノ安寧秩序ヲ保持スルニ足ラス衆民疑懼ノ念ヲ懷キ適歸スル所ヲ知ラサルノ狀アリ韓國ノ靜謐ヲ維持シ韓民ノ福利ヲ増進シ併セテ韓國ニ於ケル外國人ノ安寧ヲ計ルカ爲ニハ此ノ際現制度ニ對シ根本的ノ改善ヲ加フルノ必要アルコト瞭然タルニ至レリ

日韓兩國政府ハ前記ノ必要ニ應シテ現在ノ事態ヲ改良シ且將來ノ安固ニ對シテ完全ナル保障ヲ與フルノ急務ナルヲ認メ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ承認ヲ經兩國全權委員ヲシテ條約ヲ締結セシメ全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトトナセリ

該條約ハ八月二十九日ヲ以テ之ヲ公布シ同日ヨリ直ニ之ヲ施行スヘク日本帝國政府ハ同條約ノ結果朝鮮ニ關スル統治ノ全部ヲ擔當スルコトトナレルヲ以テ茲ニ左ノ方針ニ依リ外國人及外國貿易ニ關スル事項ヲ處理スヘキコトヲ表明ス

一、韓國ト列國トノ條約ハ當然無効ニ歸シ日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラルヘシ

朝鮮ニ在留スル諸外國人ハ日本法權ノ下ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有シ且其ノ適法ナル既得權ノ保護ヲ受クヘシ

日本帝國政府ハ併合條約施行ノ際現ニ朝鮮ニ於ケル外國領事裁判所ニ繫屬スル事件ハ最終ノ決定ニ至ル迄其ノ裁判ヲ續行セシムルコトヲ承諾スヘシ

二、日本帝國政府ハ從來ノ條約ニ關係ナク今後十年間朝鮮ヨリ外國ニ輸出シ又ハ外國ヨリ朝鮮ニ輸入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル外國船舶ニ對シ現在ト同率ノ輸出入税及噸税ヲ課スヘシ

朝鮮ヨリ日本ニ移出シ又ハ日本ヨリ朝鮮ニ移入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル日本船舶モ亦今後十年間前項ノ貨物及船舶ニ對スルト同率ノ課税ヲ受クルモノトス

三、日本帝國政府ハ今後十年間日本國トノ條約國ノ船舶ニ對シ朝鮮開港間及朝鮮開港ト日本開港間ノ沿岸貿易ニ從事スルヲ許スヘシ

四、從來ノ開港場ハ馬山浦ヲ除クノ外舊ニ依リ之ヲ開港トナシ更ニ新義州ヲモ開港トシ内外船舶ノ出入及之ニ依ル貨物ノ輸出入ヲ許スヘシ

帝國政府ハ又亞爾然丁國、伯刺西爾國、智利國、格倫比亞國、西班牙國、希臘國、墨西哥國、諾威國、和蘭國、祕露國、葡萄牙國、暹羅國、瑞典國及瑞西國ノ各政府ニ對シ左ノ宣言ヲ爲シタリ

明治四十三年八月二十二日日本國ト韓國トノ間ニ締結セラレタル條約ニ依リ韓國ハ日本國ニ併合セラレ本日ヨリ日本帝國ノ一部ヲ成スコトナレリ爾今日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラルヘク該現行條約ヲ有スル列國ノ臣民又ハ人民ハ朝鮮ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有スヘシ

{「葡萄牙國、暹羅國」の点は、出所にはなし}